東洋文庫蔵『康有為先生手札』簡釈

村田雄二郎

『康有為先生手札』（以下『手札』）は康有為の未刊書簡三通を合訂した帖装本。全十四葉で、寸法は縦三二・八cm、横二〇・八cm。表紙には「康有為先生手札　癸巳中秋節　蘇世傑署」の題簽がある（写真1）。癸巳は西暦一九五三年。蘇世傑（一八八三―一九七五）は広東省四会県大沙鎮の人。清末に広東陸軍測絵学堂を卒業し、鉄路局に勤務するとともに、同盟会に参加し、孫文の命を受けて香港で出版・宣伝活動などを行う。民国成立後は広州にもどり、市政府などに勤務したほか、四会の初代民選県長をつとめるなど広東省の政・官界で広く活躍した。書家としても知られ、陳樹人・高剣父らと「清遊会」を組織した。中華人民共和国建国前に家族と香港に移住。一九七三年にはさらに台湾に移り、台北で逝去。（以上、主に陳栄盛「民国革命家書法家収蔵家蘇世傑」、『羊城晚報』二〇一二年五月二日、に拠る。）

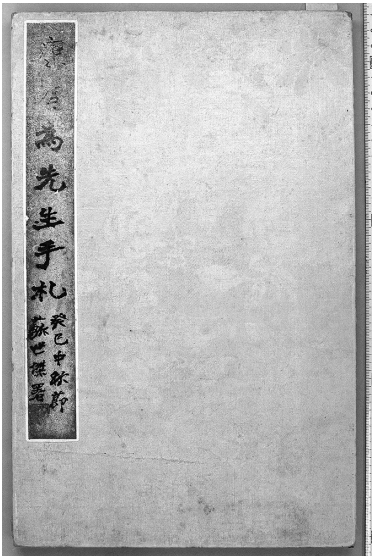

写真1

『手札』には題簽のほか、蘇世傑の文字はなく、彼が康有為書簡を入手した経緯などは一切不明である。

この『手札』は、二〇一三年八月に米国ミシガン大学名誉教授ドナルド・J・モンロー（Donald J. Munro）氏から東洋文庫に寄贈され、同文庫の所蔵となったものである。ミシガン大学で長く中国古典を講じられたモンロー氏は、『手札』を一九六二年から所持しておられたが、ハーバード大学の学友である槇原稔氏が公益財団法人東洋文庫理事長の任にあることを祝うギフトとして、これを東洋文庫に贈られたのである。モンロー氏が一九六二年にこの手札現物を所有されるに至った経緯は、同氏から附属資料として提供された中文および英文の資料によれば、おおよそ次のとおりである。若きモンロー氏は、一九六一年から六二年に台北に留学し、劉育毓氏から先秦の経書などについて個人指導を受けた。この劉氏、父姓は愛新覚羅、名前は毓鋆で、光緒帝時期に軍機大臣を務めた礼親王世鐸公の孫であった。幼児期に陳宝琛、鄭孝胥、羅振玉などから教育を受けたが、そうした師傅の中に康有為もいたという。その後、劉氏は三十余年間の独学で儒道仏の経典を修め、著述も行ったが、一九四八年に台湾に移住、郷村に隠棲した。一九五八年から外国人留学生の博士論文の指導に携わるようになり、その後の十一年間に米国人三十三人を含む四十一人を指導し、内二十数人が博士号を取得して、大学教員になったという。モンロー氏はまさにその一人であった。モンロー氏によれば、劉老師はしばしば台北に出て来たが、康有為のかつての第二夫人を同行することが多かったという。劉氏が康有為の自筆書簡を入手したのはその夫人からではないかというのがモンロー氏の推測であるが、いずれにせよ、蘇世傑の台湾移住に先立つこと十年以上前の一九六二年に、それをモンロー氏にプレゼントしたのは劉育毓氏である。

康有為（一八五八―一九二七）、原名は祖詒、字は広廈、号は長素・明夷・更生・更甡など。広東省南海県の人。乙未（一八九五年）の進士。初め同郷の大儒朱次琦に学ぶも、漢学・宋学に慊らず、道・仏や陽明学に親しみ、また折から中国に紹介され始めた西学にも触れた。やがて独自の経書解釈にもとづく「変法」「改制」を首唱し、上書活動を展開した結果、戊戌（一八九八年）には光緒帝に謁見を許され、明治維新にならった一連の政治刷新策を建言した。戊戌維新の失敗後は日本に亡命、その後カナダに渡り保皇会を結成するとともに、マレー・インド・シンガポール・香港・日本などに寄寓して「保皇」を旨とする旺盛な著作活動を続ける。辛亥革命後に帰国するも、中華民国の民主共和制には批判的で、立憲君主制の翻版である「虚君共和」を唱えるとともに、孔教を国教にすることを主張して、陳独秀ら『新青年』一派から攻撃された。晩年は青島に隠棲し「天遊老人」と号した。

『手札』は、サンフランシスコ在住華僑向けの華字紙『世界日報』編集同仁など海外の支持勢力に宛てた三通の書簡を収める。署名「更甡」のある第一書簡のみ康有為の筆に似るほか、第二、第三書簡は門人あるいは家人の書写になる。いずれも日付をもつが、年を欠く。書簡の内容や署名から判断して、民国六年から七年にかけて書かれたと推定される（後掲書簡①注（3）参照）。近刊の『康有為全集』全一二冊（姜義華・張栄華編校、北京、中国人民大学出版社、二〇〇七年刊）にはすべて未収録。以下、便宜的に書簡の順に①、②、③と番号をふり、主な内容と原文を紹介する。

写真2

書簡①　『世界日報』同仁宛。民国六年一月三日（一九一八年二月一三日）付。上海朶雲軒製箋、紅紙黒字。新年の祝いとともに、『世界報』が他の華字紙におされ、勢いを失いつつあることを嘆き、梁朝傑を主筆に復帰させるよう求める内容。（写真2）

書簡②　憲政党同志宛。民国六年一二月一五日（一九一八年一月二十七日）付。紅紙黒字。中国はアメリカなど他国と違って民主共和制に適さず、秩序の維持、政治の安定のためには、専制（帝制）が必要であることを論じ、自作『共和平議』を読むように求めたもの。張勲復辟が失敗し、アメリカ公使館に避難した後、無事自宅に戻ったとの記述があることから、民国六年冬の作だ

と断定できる。ほぼ同時に発表された重要著作『共和平議』と重なる表現が多く見られ、この時期の康有為の心情や民国政治への見方を語った書簡として『手札』の中では最も重要なものである。（写真3）

書簡③　梁朝傑宛。四月十日付。上海九華堂宝記製箋、白紙黒字。『世界日報』編集部に門人の陳国渠（こくく）を紹介し、給料を増額するように依頼する内容。（写真4）

以下、全文を掲げ、注を付す。原文には日本の常用漢字を用い、適宜句読点を付し、段落を区切った。また、改行台頭は一字空けで示した。

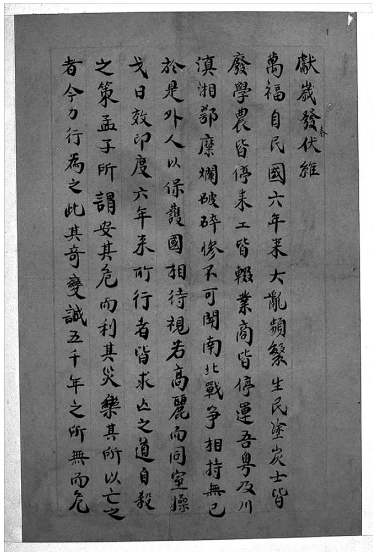

写真3

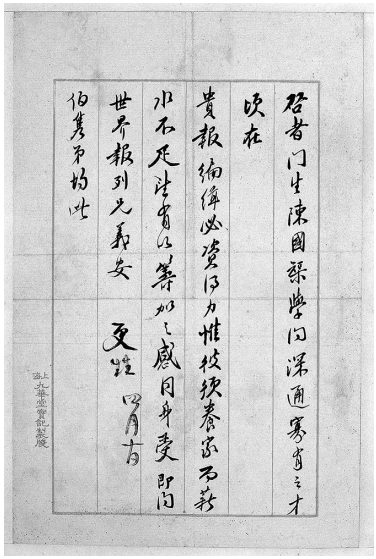

写真4

【書簡①】

献歳開春、想　万福、新年宜吉語。

惟今国事如此、祇望天心。『世界報』[1]所関美中清議最大。伯雋[2]高文博学、深心大用、海内所少有。竭数年之力、令此報有美誉有喜色。今聞此報日落為別報所攻駁、亦不敢答、大為人軽笑。恐従此日落矣、不止辜負伯雋心力、不止失吾党名誉。方今国事所関最要、更恐是非亦乱、則所関尤大。観此情形、非請伯雋復出主筆不可。捨伯雋在海内亦無此才。吾已特函、令伯雋復出主筆、想　諸君必有同心。望　諸君力請伯雋再出『世界報』為主筆。庶幾清議讜論能正人心、妙筆佳文能興報事。望速照行。即頌　列位同志兄春祺。

康更甡[3]啓　正月三日

注

(1)『世界日報』のこと。一九〇二年にサンフランシスコで保皇会機関誌として創刊された『文興報』の後身として、梁朝傑、梁君可を中心に一九一〇年に同地で発刊された。

(2)伯雋（はくせん）は梁朝傑（一八七八―一九五六）の字。号は文夫、出雲館主人。広東省台山県の人。光緒十七（一八九一）年の挙人。一四才で康有為の万木草堂に入門し、十大弟子の一人に数えられる。一八九五年、康有為の公車上書に最年少で参加。戊戌政変後サンフランシスコに渡り、『文興報』『世界日報』の編集に主筆として長期間携わり、保皇会の宣伝活動につとめた。著書に『出雲館文集』など。

（3）「更甡（こうしん）」は、康有為の字の一つ。一八九八年九月の戊戌政変で亡命した康有為は、生まれ変わりを意味する「更生」の号を用い始めた。さらに、一九一七年の張勲復辟の失敗でアメリカ公使館に避難し、その後公使館の庇護の下、北京を離れて上海の自宅にもどってからは、二度目の生まれ変わりを意味する「更甡」を号とした。書中に見える「惟今国事如此」や「方今国事所関最要」の語から推して、民国六（一九一七）年の張勲復辟事件からほどなくして書かれたものと思われる。

【書簡②】

献歳発春、伏維　万福。

自民国六年来、大乱頻繁、生民塗炭、士皆廃学、農皆停耒、工皆輟業、商皆停運。吾粤及川・滇・湘・鄂糜爛破碎、惨不可聞。南北戦争[1]、相持無已。於是外人以保護国相待、視若高麗、而同室操戈、日効印度。六年来所行者、皆求凶之道、自殺之策、孟子所謂「安其危而利其災、楽其所以亡之者[2]」。今力行為之、此其奇変、誠五千年之所無、而危険将為高麗、亦五千年之所未有也。

推求其故、皆共和為之。夫共和者、「天下為公」、「選賢与能[3]」。此孔子大同之制、豈不極美哉。然美国行之而治、中国行之而乱者、何也。蓋美国自華盛頓[4]至同治六年林肯[5]時、不養一兵。自林肯至麦堅尼[6]、始義兵一万。自麦堅尼東定古巴、西取呂宋、養六万。至羅斯福[7]、始養兵八万。無兵則無武人干政之事。故憲法能行而国会能立。若中南美無兵、則民主之法与美同、而歳争総統与美異。

法国誤学美国以有兵、故拿破侖陳兵五十万、下三千名士於獄、而自立為帝矣。令法国之所以安静者、則以鉄道全

備、故難以偏隅阻兵。若我国数年来皆養兵数十万、武人無数、武人之争権利者無数、而又鉄道未通、銀行聴政府盗支、人民不能監理。此皆与美国大相反者。蓋美国畛於両海、四無強隣、故能内不養兵、専事実業而至富強也。吾国人不悟立国之不同、誤以為一行共和即可富強。豈知適得其反哉。即葡萄牙行共和、今亦大乱。而墨西哥行共和九十年来、易五十六総統、近七年来、五易総統、大乱如麻、亦可畏矣。俄羅斯行共和数月来、分為九国、惨乱不可言状、尤可鑑矣。故我国大乱垂殆、不能帰罪於某人某人也。乃誤行共和致之。

蓋行美国聯邦制、則自行分削、愈小愈弱、印度可鑑矣。若行美総統制、則吾国非聯邦而為統一。吾国地大、非専制不能弭乱、則必腹心爪牙布於全国、若是則復行専制、則復於帝制、人心必不服、必将復乱、即不称帝而専制。若爹亜士[8]非不能定全墨三年也。而卒招馬爹羅[9]倒之、遂大乱至今。或謂今政府無才、仮令有才如爹亜士、亦召乱而已。若行法責任内閣制、則総理総統必相争不和、在法已然矣。若今段・黎・馮[10]因争権而乱国、遂至於今日。人至当互争時、必一切無所顧、故寧為売国、以求勝敵。于(ママ)是有軍器同盟之事、将我四万万人尽売為猪仔[11]矣。今南北和戦已無収拾、至明年六、七月争大総統時、争者更劇、愈売国而不顧、則我五千年之中国立亡、万劫沈淪、永不能復矣。

嗚呼！　君等知印度・高麗・台湾之惨状乎。今真到眼前矣。吾昔知之、故十八年前在印度時作『政見書』[12]告会中同志、即以告全国同胞、而国人不聴也。至乙巳時、居墨作『法国遊記』[13]以告国人、而国人又不聴也。及辛亥革命作『共和政体論』[14]、『中国救亡論』[15]以戒国人、而国人又不聴也。至癸丑作『不忍雑誌』[16]以戒国人、而国人又不聴也。故中国至今乱危若此矣。中共和之害中国若此。故僕以為救中国、非虚君共和不可。且吾党固以保皇[17]為義、又以帝国憲政[18]為義者也。今民国六年未定憲法、尤与吾党名憲政大相反者也。故僕数年来経営復辟之事、五月間与張大帥[19]力任其艱、既

成功矣。挙国厭共和之乱已久、莫不欣然。惜其左右専権、籌備不周、調兵過少、遂至蹉跌。然至今国人咸思復辟外更無救国之法。試観日本之富強、実行君主立憲之故。蓋政本不乱、乃可行政而図富強。若行共和、則総統総理日争、政本既乱、無為計也。僕講明救国之法無以易此、清朝不聴我言則亡、民国不聴我言則将亡。吾　各同志已知之。今国人聴我言、猶可救也。若仍不聴我言、同帰於尽為印度・高麗而已、為奴隷牛馬而已。

年来少致書於各埠者、一以民国来大義難明、二則不知　同志中知識若何、有無変化否。頃自五月敗後、幽居於美使館、撰成『共和平議』六十五篇[21]、印於『不忍雑誌』中。今已刻成、伝布天下、我　同志諸君取而閲之、可知共和之得失矣。僕承美公使[22]優待、居使館半年、平安無恙。今又派参賛及武員専車護送出京、復還旧居[23]、皆美使之大徳也。請勿遠念。在吾人又為第二次更生矣。再遭大劫、只為救国無可如何。我党　同志同心愛国前後廿年、　高義熱心始終如一、助我多矣、無以為報。今吾出険、吾　同志必大歓喜、何以教我既為党衆救国宗旨、能否与吾全同。望毎埠各閲『共和平議』後、各開大会、貽書見教。若宗旨皆同、則誓大衆同心如何如何。敬頌　年禧。不備。

憲政会[24]列位同志兄

名正具　十二月十五日

注

（1）康有為がアメリカ公使館に避難している間、段祺瑞国務総理の権力掌握に反対する孫文グループや海軍軍人、国会議員の一部は広州に独自の政府を樹立し、政局は南北対立の様相を呈した。

（2）『孟子』離婁上。康有為は第一上書（一八八八年）にも「安其危而利其災」の一節を引く。
（3）『礼記』礼運。康有為には『礼運注』（一九一三年刊）の作がある。
（4）アメリカ合衆国初代大統領ジョージ・ワシントン（George Washington）。在任一七八九―九七。
（5）アメリカ合衆国第一六代大統領エイブラハム・リンカン（Abraham Lincoln）。在任一八六一―六五。同治六年は西暦一八六七年だから、ここは康有為の誤記。
（6）アメリカ合衆国第二五代大統領ウィリアム・マッキンリー（William McKinley）。在任一八九七―一九〇一。
（7）アメリカ合衆国第二六代大統領セオドア・ローズベルト（Theodore Roosevelt）。在任一九〇一―〇九。
（8）メキシコ大統領ポルフィリオ・ディアス（Porfirio Díaz）。在任一八七七―一九一〇。
（9）メキシコ大統領フランシスコ・マデーロ（Francisco Madero）。一九一〇年に始まる革命でディアスを退任に追い込み大統領に就任。在任一九一一―一三。
（10）張勲復辟事件時の国務総理段祺瑞、総統黎元洪、黎元洪の後を継いだ代理総統馮国璋を指す。
（11）子豚を意味する広東語から転じて、清末民国期に広東・福建の沿岸部から契約労働者として海外に渡った「華工」を指す。
（12）『南海先生最近政見書』（一九〇三年刊）。「答南北美洲諸華商論中国只可行立憲不能行革命書」と「与同学諸子梁啓超等論印度亡国由於各省自立書」を併せて一書としたもの。
（13）乙巳は西暦一九〇五年。一九〇四年六月、康有為は香港を発ち、初めてヨーロッパ周遊の旅に出た。訪れた国は、イタリア・スイス・オーストリア・ハンガリー・デンマーク・スウェーデン・オランダ・ベルギー・ドイツ・フランス・イギリスの十一カ国である。その後、カナダに渡った康有為は『欧州十一国遊記』をまとめた。『法国遊記』はその一部であり、刊行は光緒三十三（一九〇七）年六月。
（14）鉛字排印本、出版年・出版地なし。のち『不幸而言中不聴則国亡』に収録。

(15) 正しくは『救亡論』。『不忍雑誌』第七冊（一九一三年八月）に掲載され、のち『不幸而言中不聴則国亡』に収録。

(16) 一九一三年二月創刊、上海広智書局発行。康有為が編集の中心にあって、清末期の自身の上奏文や『孔子改制考』『礼運注』などの著述、および民国成立以降の論考を多く掲載した。

(17)(18) 注（24）参照。

(19) 張勲（一八五四―一九二三）を指す。張勲は清末民国期の軍人。江西省奉新県の人。原名は和、字を少軒、紹軒、号を松寿と称す。袁世凱の新建陸軍に入り、辛亥革命では江南提督として南京で革命軍と交戦。民国成立後も清朝への忠誠を隠さず、部下に辮髪を切ることを禁じたため「辮帥」（辮髪将軍）の異名をとった。安徽督軍であった一九一七年六月末、府院の争い（大総統府と国務院の権力闘争）を調停するとの名義で入京し、七月一日清帝溥儀の復辟を宣言したものの、わずか一二日で失敗、オランダ公使館に逃げ込み、晩年は天津に隠棲した。

(20) 康有為にはこの時期に刊行された『不幸而言中不聴則国亡』（一九一八年七月、上海長興書局刊）の単行本もある。「我が言を聴かざれば則ち〔国〕将に亡びん」とは、当時彼が好んで用いる常套句であった。

(21) 最初『不忍雑誌』第九・十合冊（一九一七年一二月）に掲載され、一九一八年三月に上海長興書局より三巻一冊の単行本として出版。ただちに陳独秀「駁康有為共和平議」（『新青年』第四巻第三号、一九一八年三月）の批判を引き起こした。

(22) 当時のアメリカ公使はポール・ラインシュ（Paul Reinsch）。在任一九一三―一九年。

(23) 康有為が張勲復辟の失敗後、アメリカ公使館に身を隠したのは一九一七年七月八日、ラインシュ公使の庇護下に公使館を出たのは同年一二月六日であり、ほぼ五か月間の避難生活であった。アメリカ公使館の車で北京を離れた康有為は天津経由で青島にしばらく滞在し、その後大連、済南を経て、上海の寓居「沁園」にもどった。（馬洪林『康有為大伝』、瀋陽、遼寧人民出版社、一九八八年、五六六頁、六五一頁。楼宇烈整理『康有為自編年譜（外二種）』、北京、中華書局、一九九二年、一九三頁。）

(24) 康有為を中心に結成された政治団体「憲政党」のことと思われる。その原型は、一八九九年にカナダで創設された「保皇会」で、南北アメリカ・香港・澳門・日本・南洋の各地に分会を設け、光緒帝を救い、西太后一派を排除することを目指して海外で大々的に宣伝活動を繰り広げた。一九〇六年九月に清朝が予備立憲を宣布すると、康有為らはこれに呼応すべく、一九〇七年二月に「保皇会」を「国民憲政会」に改称し、三月にはさらに「帝国憲政会（中華帝国憲政会）」と改めた。一九一二年二月に清帝が退位すると、康有為は「国体已に君主立憲に非ず」として「帝国憲政会」を「国民党」に改称することを決めた（「致各埠書」〔一九一二年二月一九日〕、『康有為全集』第九集、二八二頁）。だが、同年五月になって北京では国民協会・統一共和党・共和建設討論会・国民公党の四政党が連合して「国民党」を結成する動きが現れ、党名の重複問題が浮上した（「与梁啓超書」〔一九一二年五月二〇日〕、『康有為全集』第九集、三〇一頁）。後者の「国民党」は結局成立に至らず、康有為の弟子徐勤は六月二五日付けの海外支部宛の書簡で、党名を「中華帝国憲政会」から「国民党」に改称すること、康有為が会長、梁啓超が副会長になることを通知した（丁文江・趙豊田編、島田虔次編訳『梁啓超年譜長篇』第三巻、東京、岩波書店、二〇〇四年、二七九―二八〇頁、四八四―四八五頁）。「国民党」が何時、どのようにして「憲政党」に改称されたのかは不明だが、おそらく一九一二、一三年の間だろう。康有為は自ら「憲政党章程」（『康有為全集』第九集、四一三―四一四頁）を起草しており、海外党員からの義援金は康有為の生活や活動を支える資金源となった（「憲政党義捐徴信録」、上海市文物保管委員会編『康有為与保皇会』、上海、上海人民出版社、一九八二年、五三八―五四三頁）。康有為の死後まもなく梁啓超と徐勤の連名で「憲政党同志」への死亡通知が発せられていることから、民国初年から康の死まで憲政党が存在したことを確認できる（「梁啓超徐勤致憲政党同志書」、蔣貴麟編『万木草堂遺稿外篇』（下）、台湾、成文書局、一九七八年、八九六―八九七頁）。

【書簡③】

啓者　門生陳国榘[1]、学問深通、寡有之才。頃在　貴報編輯必資得力。惟彼須養家而薪水不足。望有以籌加之、感同身受。即問　『世界報』列兄義安。

更甡　四月十日

伯雋弟均此

注

（1）不詳。

（東京大学大学院総合文化研究科教授）